

WG2 メンバー及び取り組み内容
(構想含む。公開座談会での発表順に掲載)

近畿大学



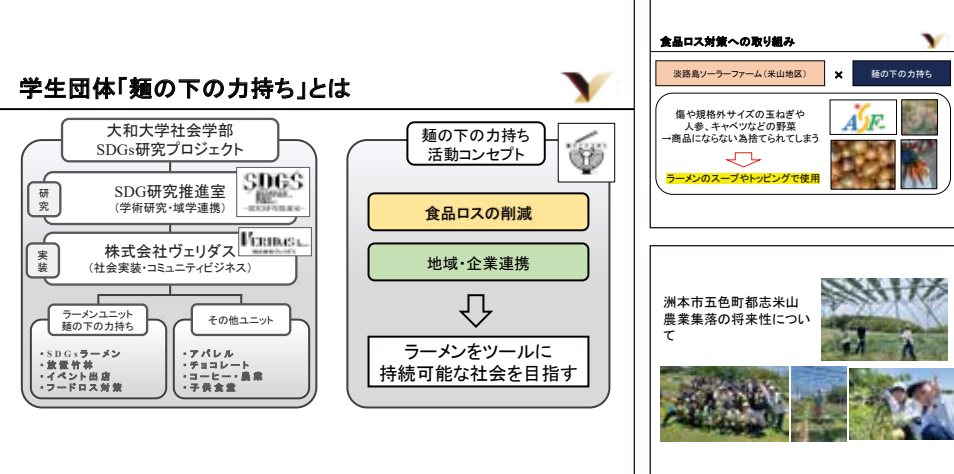
千草竹原地区における淡路島ロングトレイル構想の実現に向けた山林道の調査や整備、イベントの企画運営、鮎原宇谷地区における「鮎原宇谷地区移住＆むらづくり読本」の制作をはじめ「宇谷の未来を創る会」の伴走支援を通じた地域づくりのサポートを実施。

大阪工業大学



市中心部部の古民家を交流拠点「よしまち荘」としてリノベーション。コンペ形式でコンセプトや空間計画を検討した上で、地元事業者等との協議を通して3つのプランの折衷案として基本設計を行った。学生たちは施工にも参画。次年度以降も更なる拡充を予定。

大和大学



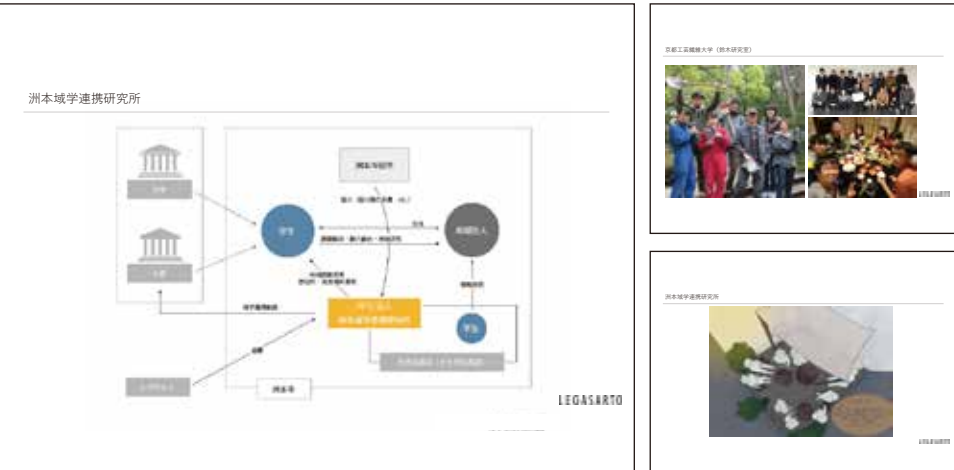
「レトロなまち歩き」の運営、学生団体「麺の下の力持ち」による食品ロス削減、地域課題解決を目指したラーメン開発と普及活動、SDGs 連携協定に基づく、持続可能な社会づくりの一環としての放置竹林整備、農業体験等に取り組む。

株式会社 E-konzal



「さとやま」と「まちなか」との連携による相乗効果を目指した市街地での拠点整備、田舎体験のイベント企画運営等を通じた関係人口創出やマッチングの為の事業に従事。大和大学との連携による「洲本市での取り組みを市街地に逆輸入する」プロジェクトも計画。

レガサルト株式会社



建築改修（ついどはん、米田屋等）を通して域学連携事業に参画していた OB が業務内外で洲本市との関わりを継続。市街地の新たな拠点整備を通して、域学連携事業のアーカイブや学生と地域との更なる繋がりが創出の為の法人「洲本域学連携研究所」設立を構想中。

株式会社大同印刷所



あわじ里山プロジェクト、武庫川女子大学との連携による放置竹林対策を通じた竹 100%の手漉き和紙「かぐや姫紙」制作プロジェクトを推進。プロダクト制作のみならず、放置竹林問題の認知度向上、里山体験のコンテンツ化等にも取り組む。

本 WG「様々な連携大学・連携団体の多様な活動」では、様々な立場からの意見の収集とアーカイブ、加えてシンポジウム当日の参加者増加を図る為に、WG 外の間人も一般聴講者として参加して頂くことを前提とした、オンライン形式のセミオープンな座談会（≒WG そのものの公開イベント化）という方法を取った。全 3 回の中で WG メンバーには洲本市での取り組み内容やその成果、課題について発表頂くと共に、モデレーターやコメンテーター、一般聴講者を交えたディスカッションを行い、それらの統合を通してヨソモノの視点からみた域学連携の批評、今後の 10 年に向けた提言として整理することとした。

ヨソモノからみた“域学批評”の 16 の論点

01

持続性の検討(1) 仕組みの是非と偶然性の設計

▼学生と地域とがぐっと近づく時間や距離感をあざとく設計していく必要がある(コメ)▼学生がボランティアではなく「地域で学んで稼げる」ようなベネフィットの仕掛けをつくりたい(企業)▼決められたスキームに乗っかかり続けると進歩がない。おせっかいや余計なことを進めていく先に革新があるようにも思う。域学連携の体系化は社会にとっては必要かもしれないがイノベーション力を削いでしまうのかもしれない(企業)▼銭湯に行った時に大雨が降ってきて、洲本市の方に車で送って頂いたことがある。(そうした偶然の出来事で)人の温かさを感じることは多かった(学生)▼僕らが考えるイベントはあまり偶然性が生まれないパッケージになりがちなので、地域のニーズに応えていくことを大事にしたい(企業)▼プログラムの「余白」が重要だと思っている(一般)

仕組み化は一方で偶然性の排除でもある。「出たとこ勝負」の功罪を振り返りながら、これからの域学連携は何をどこまでデザインすべきか。

02

持続性の検討(2) プロジェクトの持続とその定義

▼学生が卒業したら終わってしまうのだらうと思って見ている。そこを何とかしたい。域学発のプロジェクトで関係会社に持っていきけるものもあるかもしれない(企業)▼手弁当的な側面はあるが、イベントをやって楽しかったで終わりではいけない(企業)▼洲本に限らず域学連携の OBOG 組織はポンポン生まれるが大体何もできずに自然消滅していく。じゃあ何が残れば良いのかと考えた場合、この 10 年で組み立て切れていない(大学)▼何を持って「持続性」と見なすのか、朽ちるものや飽きるものといった「確固たるものではないもの」を作って見直し続けることも重要な気がしている(大学)▼何も変わらないことを持続とみるのではなく動的平衡を目指すことも重要(企業)▼今回の GW のような機会は今後も必要(大学)

活動をどう持続させるかは域学連携事業の 1 つの至上命題である。一方で何ををもって持続とみなすのかという前提設定にも向き合う必要がある。

03

持続性の検討(3) 関係人口を繋ぐシステム

▼引退の時期が近づいている。足を運ぶなくなるのは寂しいが「地元民未満・観光客以上」みたいな感じになれば(学生)▼若者の人生経験として洲本を通り過ぎていくことも肯定しなければいけない(コメ)▼協定や契約が縁の切れ目となることはいかがなものか(コメ)▼協定は「終わらせることができる」ことが大事なのかもしれない(大学)▼知ってもらふ広報と忘れさせない広報、後者がより重要であるように思う。プロジェクトはすぐに生みだせるが、それらをどのように続けていけるか、選んでもらい続けるかが重要(コメ)▼これからは思い出せる広報も必要かもしれない(大学)▼域学連携 OBOG の為の窓口を準備しているところである(学生 OBOG)▼人を介して更に次の人と繋がったり、地域と繋がりが続くことをテクノロジーを使って実現させたい(企業)

多くの卒業生が地域に関わる中、更なる関係をつくることの重要性は言うまでも無いが、今後はその手法やシステムの検討も重要な検討事項である。

04

地域へのまなざし(1) 地域づくりの大黒柱は何か

▼毎年同じことを説明するのは負担だという声もある。その接着剤のような役割は企業が担うべきなのかもしれない(企業)▼短いスパンでプレイヤーが入れ替わり続けるのは地域側からみたら疲れると思う(企業)▼色んな取り組みが同時並行で走っている。(スピード感に)ふるい落とされている方もいるだろう(企業)▼地域でプロジェクトの渋滞が起こっている。地域の大きな物語の中に取り組みを蓄積させていくような、ひとつの目標に向けてそれなりに真っ直ぐに進んでいるという認識づくりが重要。仮にヨソモノがそれぞれ好きのように振る舞っているにも動かないようなシナリオを地域ごとに設ける必要があるが、地域だけでそれをつくるのは難しい(大学)▼10 年後の地域はどうなるのか、長期的に何をすべきか、残すべきかを考えなければならない(コメ)

ヨソモノの流動とその受入を繰り返す負担を軽減し、長期的な地域づくりに向けた大黒柱を、地域内外の協働で設計することが急務である。

05

地域へのまなざし(2) 重要な人材と組織

▼人と人とを繋ぐ地元のハブの方が重要だった。次々と新しい人と知り合っていく中で「沼」にはまっていった感覚がある。人との縁が広がっていった時に面白さを感じたという学生も多い(学生)▼提案とまではいかないようなアイデアを一蹴するのではなく面白がってくれたり、前向きなコメントをくれる人の存在は重要だった、そこから考えを深めていくことができた(学生)▼ビジョンを共有できている志のある地元企業と連携できたことで、取り組みの継続や横展開の上で大変助かった(企業)▼地元と学生を繋ぐエスノ３ジョウの存在そのものが重要だった、自分 1 人では地元のためには何かを始めるのは難しかった(学生)▼丸投げされると学生は冷めてしまう。連携というからには地域と学生とが二人三脚の関係である必要がある(大学)

ヨソモノと他の人間とのハブとなる人間、ヨソモノの妄想を引き出してくれる人間、他、同志となる地元企業やプラットフォームの重要性が挙げられている。

06

地域へのまなざし(3) 域学連携インフラの拡充

▼長期滞在施設が増えれば定期的に学生が地域に通うことができる(大学)▼点に在る淡路島の魅力を学ぶ為にも交通インフラは課題である。高齢者の移動等とシェアできないか(大学)▼車が必須の地域なので移動は難しい。乗り合いタクシー等があればとても助かる(学生)▼交通手段についてはコストも掛かる為課題になっている(大学)▼域学連携事業の発足からの取り組みや地域の変化、各大学の専門性、卒業後のネットワーク等についてデータベースを整備することで(その後の繋がりが)立体的になっていけば良いと思う(企業)▼ふるさと納税を活用することで財源の確保のみならず関わり方の選択肢を広げることにも繋がるのでは(大学)▼財源の面をヨソモノが支える仕組みづくりは今後の 10 年で重要だと思う(大学)

旅費負担や宿泊無料化等、域学連携を進める為のインフラは 10 年間で大幅に拡充されたが、情報の蓄積も含め今後の更なる拡充を求める声は多い。

07

地域へのまなざし(4) 関わっていない層の存在

▼一部の方には面白がってもらえるがほとんどの人は無関心なのが現実。どうアプローチすべきかはずっと悩んでいる(企業)▼関係人口を考えれば考えるほど地域の無関係人口も拡がっていく。軋轢を生んでしまう恐れもある。地域といっても結局は 1 人 1 人の集まり(大学)▼域学連携は地域の女性陣が支えている部分もある。域学で関わる女子たちによって何かが変わったり、代弁するような動きになれば良いと思う(コメ)▼小学生や中学生等、これまでの 10 年でリーチできていない層との関わりや教育が重要だと思う(企業)▼例えばどこかの農家が大勢の学生でお手伝いした時に、地域内での姑みみたいなことが起こりそうな雰囲気はある(大学)▼できれば悉皆調査のように地域全体のニーズや実態を調べたい(大学)

長い時間を掛けて多くの地域と学生とを繋いできた中、例えば小中学生や女性陣等、関わりを持てなかった層も少なくない。

08

域学連携と企業(1) 改めて、洲本市のポテンシャル

▼民間企業も自治体や学生との連携や、持続可能な社会づくりへの参画を強く求めている傾向にある(企業)▼洲本市はとにかく自治体としてフットワークが軽いという印象。初めて取り組むことに対する障壁が低いことが 10 年間の成果なのかもしれない(企業)▼提案に対して、逆に提案を頂いたより、関係各所に繋いで頂いたりして、すぐに具体的な取り組みに繋がって有り難かった。そうした繋ぎや取りまとめをして頂ける人間は地元に必要な(企業)▼設計の余地、デザインの余地のある地域だと大学としての需要も大きい(大学)▼地元が地域おこしに熱を入れているということは実感できる(大学)

大学からみた洲本市がそうであるように、フットワークの軽さや速さ、地域づくりへの熱心さは企業の視点においても高く評価されている。

09

域学連携と企業(2) 事業としての採算性

▼企業が関わっているからといって必ずしも採算性を重視している訳ではない。単体の事業だけで採算性を取ることを考えると面白いことはできないように思うし、黒字以外の価値があると思ってやっている(企業)▼マネタイズ無しに継続できないことは事実ではあるが、まずは「いけるところまでいこうじゃないか」という気持ちや地域づくりに関わる重要性が大きい(企業)▼どれだけ儲かるの?ということは社内でも説明が求められるが、逆にそれさえ説明できれば何でもできるということでもある。取り組みやテーマに対する強い思いさえあれば事業性の説明はどうとでもなる。取り組みそのものというよりはそれに付随する業務で採算をとるような方法もある(企業)▼採算が取れるに越したことはないが、長い目・広い目で投資としてみている面はある(企業)

域学連携に関わる企業にとっては採算性よりも社会課題へのアクセスや「面白いこと」への挑戦の方が重要とする向きが強いが、どう解釈すべきか。

10

域学連携と企業(3) 企業と大学との新たな関係

▼域学連携が企業のリクルートの場になるということもあるのかもしれない。従来のインターンは大学としてはあまり良い印象はないので(大学)▼域学連携の枠組みの中でインターンシップを企画したい(企業)▼社会人になっても地域に関わり続ける人がいる、その為の手段があるという様子を学生に見せることは重要だと思う。域学連携の良いところなのかもしれない(コメ)▼平日のど真ん中に「これだけ自由な仕事を地域でやっている、真面目に遊んでいる」背中を見せたい。社内の若手にも伝えていきたい(企業)▼大学の教員や職員には「場を作ったので後はやってくれ」で終わりではなく、プロジェクトの意味や理由を自分の声で学生に伝えてほしい。企業も同じで上司が旗揚げした後に部下に丸投げする構造はよくあって、それではいけないと思う(企業)

地域と企業・地域と大学の 1:1 関係は無く、三者のシナジーを生み出す体制を、これからの域学連携を通して実現させていく必要がある。

11

学生へのまなざし(1) 幻想と可能性

▼地域の方が過度な期待をし過ぎていて、学生と地域との間で摩擦が起こっているのではと感じる時がある。例えば学生の参加者が少なかった時の代替手段を地域が持っていない。アルバイトや授業の負担になる時もある(学生)▼実学的な専門分野を持たない学生の中には、現場での目的意識を失っている人間も多い。それでも地域の中での役割はあると思っている(教員)▼どこまで実現可能なのかを探る時は苦労した(学生)▼学生には「それで良いのか、楽しいのか」と何度も確認しながら進めてきた。学生にとって面白いかどうかプロジェクトとして重要、これから大事にしたいと思っている(コメ)▼学生を叱れる人間が地元で重要。クライアント然とする態度も重要(大学)▼過度な期待は(地域も大学も)お互い様かもしれない(一般)

専門性や可能性を有する一方で未熟でもある学生に対し、地域側は何をどこまで期待すべきなのだろうか。幻想と現実の間で地域も学生も悩んでいる。

12

学生へのまなざし(2) モチベーションの多様性

▼正直なところ学生間のモチベーションの差はあったように思う。1 週間以上の泊まり込み等、自分の時間が圧迫され始めると特に差が出てくる印象だった。当時の意識の差は卒業後の関わりにも大きく影響しているように思った(学生 OBOG)▼現在のメンバーは明確に洲本でやりたいことがあって活動をしている人が多い訳ではないが、だからといって熱量が低い訳では決してない。「とにかく地域で何かをやりたい」「洲本というより事業自体のテーマに興味がある」みたいなモチベーションもある(学生)▼学生が世代交代した時に、昔と比べて「モチベーションが低い」と捉えられることもあるが、興味関心が変わったというだけでそう思われるのは良くないと思う(学生 OBOG)▼モチベーションが低い訳ではないが、もっとのびのびとやりたい(学生)

学生の興味関心やモチベーションは様々であり流動的である。ひとつの物差しで優劣を測るのではなく、その「向き」を個性として考えなければならない。

WG2 様々な連携大学・連携団体の

コニカミノルタ株式会社



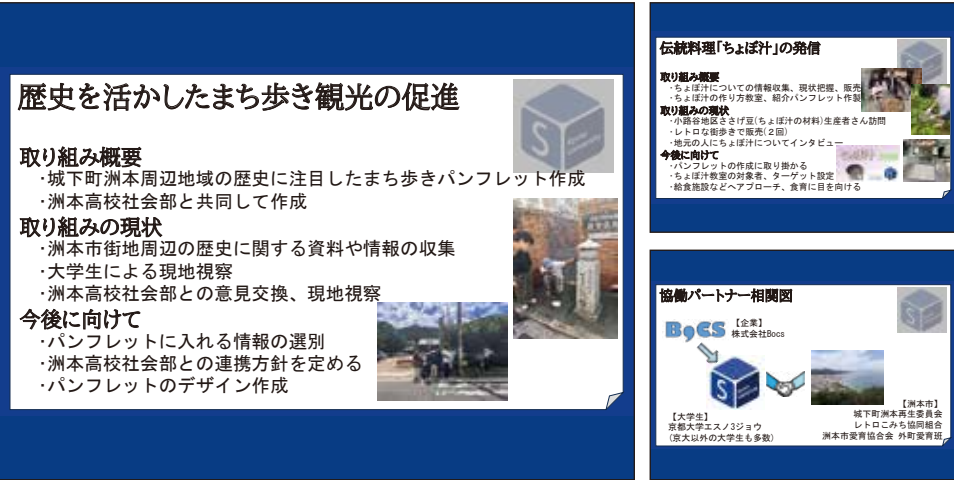
エコプロジェクトを題材に、無理の無い持続可能な Well-Being な社会の創出をビジョンに掲げ、「やらされ感」の払拭やリソースの活用、主体間の適切なマッチング機能等を備えた自律的な環境・探求教育プログラムを社内新規事業として推進中。

AKKODISコンサルティング株式会社



若者が帰ってくる／働ける洲本市の実現の為に、地元企業との連携による若手事業者・学生向けデジタル体験会やビジネスの立ち上げを推進。デジタル社会実現の為のリテラシー向上や技術習得を通した洲本市の「先進地化」を目指す。

京都大学エスノ3 ジョウ



2018 年に発足した学生団体。2023 年は株式会社 Bocs との連携に基づき、伝統料理「ちよぼ汁」の食育活用を目指したインタビュー調査やイベントでの販売、地元高校生との協働によるまち歩き観光の促進の為のパンフレット制作を実施。

株式会社ワークアカデミー



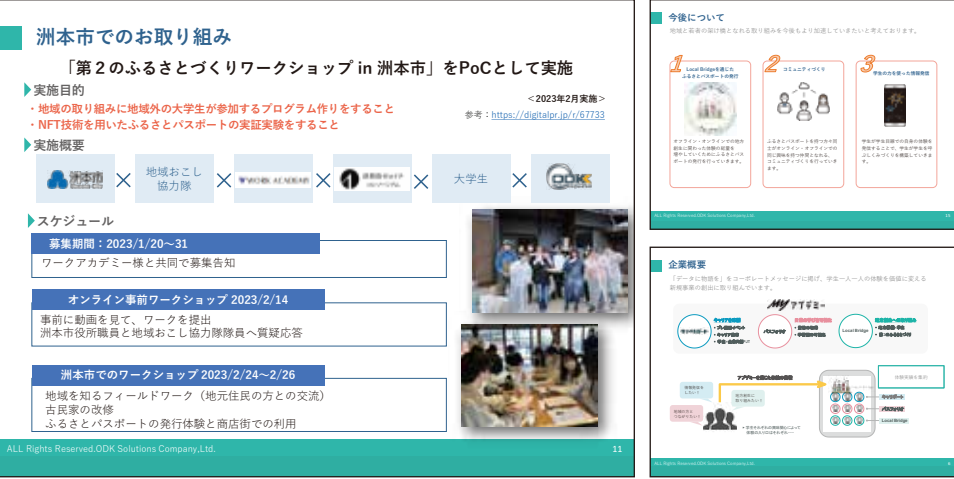
フィールドワークを伴う課題解決型学習プログラム「淡路島 CBL (Creative Based Learning)」や地域の拠点づくり支援を通した「第 2 のふるさとづくり WS」を他企業 (株式会社シマトワークス、株式会社 ODK ソリューションズ) との連携により実施。

流通科学大学しずく



Awajishima Sodatete Market の販促・広報をテーマとしたコンペ受賞を契機にボランティア団体「しずく」を発足 (後にサークルとして昇格、来春にはクラブ昇格)。マーケットのプロモーション活動やプロダクト提案を推進。

株式会社 ODK ソリューションズ



前述「第 2 のふるさとづくり WS」における、地域との繋がりを証明する「デジタルパスポート」や NFT による「貢献バッジ」の実装等に係る技術支援を実施。またこうした取り組みの延長上としてのコミュニティづくりや情報発信の仕組みづくりを推進中。

モデレーターより | これまできちんと知ることの無かった他の大学や企業の方々の取り組み内容やその成果、悩みについて共有できた有意義な機会でした。一方で自分が、学生として、教育者として、研究者として、専門家として洲本市に関わってきた 9 年間(早大大学院在籍時の 2014 年度から参画)を振り返ると、何かを成し遂げて何かを残せたのだろうか、どちらかといえば情けない気持ちになります。次の 10 年を自分なりに位置付けると、これまでの御恩をきちんと返し、挽回する為の時間なのだろうと思います。或いはもう後世にバトンを渡すタイミングなのかもしれません。いずれにしても、もう少し頑張ります。今後とも何卒宜しくお願い致します。野田満 (さんそデザイン／近畿大学)

13

地域課題の解決は無理難題か

▼正直に言えば現在のメンバーは地方創生の為というよりは活動の楽しさや地域の方の温かさがモチベーションになっているように思います。でも責任はあるので、何を目指すのかを改めて考え直さなければいけない (学生)▼地域課題 (マイナス) をゼロにする動きに専念することは良くないのでは。企業も同じで、純粋にやりたいことをやるのが推進力になる (企業)▼課題解決という目先のものごとだけがフォーカスされがちである。それも重要だが未来を創る為に何をを目指すかを決めた上で、共にその障壁を取り除いていくイメージで連携したい (企業)▼地域課題はある意味で前提条件のようなもの (コメ)▼学生にどこまでを求めるのか、そのあたりでミスマッチが起こる原因になっている。課題解決はプロでも難しい (大学)

地域づくりの多くは課題解決を基礎としたものであるが、そうしたミッション設定が事業の幅を狭めているとの見解も無視できない。

14

活動の外の世界的重要性

▼COVID-19 のせいで高校の修学旅行も無かったので淡路島に行けること自体が有難い。淡路島で飲む夜もとても楽しい (学生)▼商店街をふらふらす等、活動の合間の自由な時間は今思えばとても重要だった (学生 OBOG)▼皆でわいわいという力仕事や飲み会のようなものをどうプログラムするのか (コメ)▼副次的な楽しみが無いと保たない (大学)▼プログラムを決める際は参加者のニーズに応える為に内容が縛られてしまう面もあるが、なるべく制約を設けずフリーな時間を設けていた (企業)▼学生が授業で体験できないことを提供したいと思っている (企業)

地域づくりの為の取り組みを進める一方で、淡路島の食や風景を旅行気分で味わうことや、純粋に交流を楽しむ時間的重要性も浮き彫りとなった。

15

ヨソモノの入口の選択肢

▼学生は即戦力なのか、単なるマンパワーなのか、お客さんなのか。交通整理は必要だと思う。対して地域のスタンスも変わってくる。舞台を提供するのか顧客なのか、棲み分けが必要 (大学)▼適切な接続方法を学生自身が選べるようにすることが重要、入口の多様性が低いと単一の物差しで学生が評価されるのではという危惧はある。それは学生にとっても地域にとっても幸福ではない (大学)▼最近の学生は地方への関心が高まっていると感じる。ふるさとに貢献したい地元志向の増加等、選択肢はどんどん増えていく (企業)▼自分は洲本市出身。旧友が洲本市で働いていて 15 年振りに連絡を取ったことがプロジェクトのはじまり (企業)▼学生が地域に関わる一歩目の入口をプログラムとして作っているイメージ (企業)

これまでに様々なきっかけで、様々な立場で学生は洲本市に関わってきたが、それらの選択肢は充分だったか、適切だったかはケースバイケースである。

16

影なる功労者とエンドユーザー

▼域学連携で生まれた商品が一般の方の日常に届くことが理想なのかもしれない。取り組みを知ってほしいし、情報をきちんと届けたい (企業)▼淡路島で卒業論文を書いていた時は地元に住居させて頂いた。一件一件建物の測量をさせて頂いた時は町内会長の方を通して御願いして頂いた。それがきっかけに商店街のことにも取り組みたいと思うようになった (学生 OBOG)▼新しいヒト・コト・モノに対する抵抗が少なく何でもチャレンジさせてくれる洲本市の風土は、地域おこし協力隊の活躍や受入経験によるところも大きいように思う (大学)▼地域づくりの表舞台ではなく裏から支え続けてくれた方たちに対する認識は忘れてはいけない。そうした方々が報われないといけない (大学)

目立つ人間だけが域学連携の立役者では無い。縁の下で支え続けてきた方や、いつか成果を届けたい方の存在への意識が今後 10 年のおじまりである。

これからの 10 年に向けた提言

多様で雑多なものを統合していく

プロジェクトの方向付けを目指した中長期のシナリオ設計

ヨソモノを巻き込みながらも一貫性ある地域づくりを推進する為に、具体的な目標に基づくシナリオの設計が求められる (或いはそれ自体を大学や企業との協働によって設計することも想定される)。例え単発で断続的なプロジェクトであっても地域が意義を見出せるような中長期スパンの計画に基づき、明確なニーズに応じた域学連携の導入・継続・撤退を動的に検討していくことが重要であると考えられる。

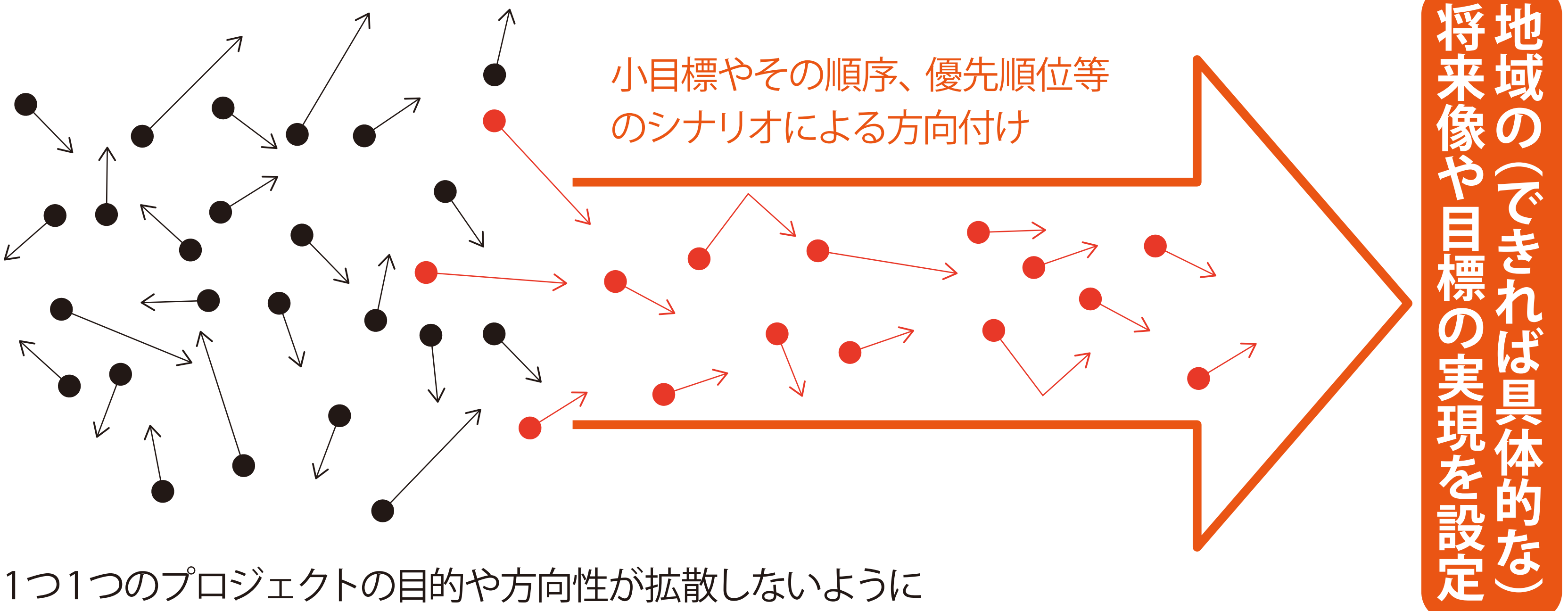
- #コンペ形式で学生や企業を募る
- #定期的に見直して軌道修正していく
- #ヨソモノを巻き込む計画をヨソモノを巻き込んでつくる
- #何の為にやるのかを常に意識
- #サザエさん時空からコナン君時空へ

多様で雑多なものを多様で雑多な価値のまま認める

余白や偶然性を計画的に残したシステム化の検討

一方でこれまでの 10 年の域学連携の成果は、偶然性を伴う出来事やそれに対する反射神経的かつ属人的な対応の蓄積によるものも大きい。今後、域学連携において一定のシステム化が進むと考えられる中で、こうした「仕組みの外の事象」の重要性を認識し、それすら意図的に組み込んだ仕組みを検討し続けることが重要である。

- #クエストカレッジにできること／できないこと
- #20% ルール
- #二項対立のせめぎ合いを続けていくことが域学連携なのかもしれない
- (理想と現実、理論と実践、実学と虚学、道徳と経済、課題解決と自己実現、…)
- #5 年に一度は域学シンポを



例

・ふとした交流や懇親の機会

・学生や企業の洲本への思い

・後に武勇伝となるアクシデント

・関係人口のきっかけとなる思い出

・その他、定性的な事象等

これまでの10年間で非計画的に起こったこと

偶然寄りの出来事≡広義の成果

例

・何らかのプロジェクトの成就

・経済効果や売上、事業利益

・参加者数、移住者数

・メディア掲載数、いいね数

・その他、定量的な目標達成等

これまでの10年間で計画的に進めてきたこと

必然寄りの出来事≡狭義の成果

今後より意図的に設計していく

→しかしそれでも意図せぬ出来事は起こる→また次の10年で計画していく→…

より高い確度で目指していく

多様な活動

の視点からみた批評

本WGでは、様々なかたちで洲本市に関わってきたヨソモノ側(大学や企業)に焦点を当てる。それぞれの活動による成果や課題、ニーズについてのディスカッションを通し、今後の10年に向けた洲本市の「ヨソモノの継続的な、或いは断続的な参画を伴う地域づくり」の為の知見を導きたい。